

松浦武四郎が残した記録 (1)



松浦武四郎がまとめた各種日誌〈松浦武四郎記念館蔵〉

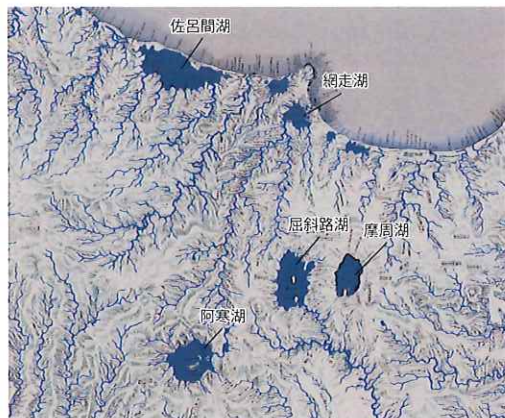
松浦武四郎は、約13年間にも及んだ蝦夷地（現在の北海道）調査の後、多くの人たちに、蝦夷地の様子や住んでいるアイヌの人々の暮らしなどについての調査成果を、数々の本にまとめ出版しました。

彼は、できるだけ多くの方に、本を通して蝦夷地の現状を知ってもらいたいという思いから、「人気ある画家たちに、絵を描いてもらえれば、多くの人たちが興味を持ってくれ、その結果、多くの人たちが本の内容を知ってくれるだろう」と考え、自分で描いたスケッチ原図を元に、画家たちにその一部を描かせました。



武四郎と樺太アイヌ・北方民族の図〈松浦武四郎記念館蔵〉（図：中山嵩岳・田崎草雲・菊池容齋・田崎澄江筆、和歌：井上文雄作・筆）

彼は本をつくる際、デザインやレイアウトなども自分でプロデュースし、多くの方々に読んでもらえるよう、工夫していました。



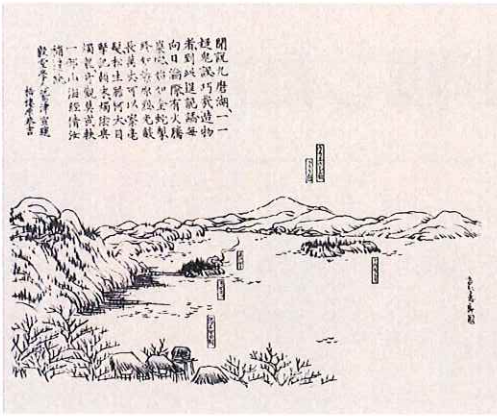
松浦武四郎が描いた東西蝦夷山川地理取調図の一部（地名の一部を加筆してある）〈松浦武四郎記念館蔵〉

彼は、蝦夷地（現在の北海道）の内陸部まで、調査記録をもとに、くわしい地図を描きました。



摩周湖眺望の図〈松浦武四郎記念館蔵〉

周圀七里（28km）の澄んだ湖は、赤い山々に囲まれて、摩周山はそばたち、龍のわだかまっている勢いである。洞穴のクマは、夕陽の時ほえようとしている。久摺日誌のそのあたりを読むと、胆が冷えるようである（漢詩訳）。（図：松浦武四郎筆、漢詩：春木南華作・工藤敬齋書）



屈斜路湖眺望の図〈松浦武四郎記念館蔵〉

聞くところ、屈斜路湖は、その1つ1つが鬼神のつくりのようで、造物主は、何と巧にこのような珍しい物を作ったものだろう。日が沈む時になれば、いつも岩穴から火が燃え上がり、はじめは金のへびが動くように、終わりには燃え上がる原野の火のように激しく見え、その炎の光は万丈もの高さに上がり、毛までがよく見えるほどである。松浦氏は何と大胆なことか、これを目撃して状景を詳しく記している。山海經にある燭陰とか燭龍と言われる神の奇観でも、これ以上と思われない。山海經にも、松浦氏の書き遺した部分をおまを補わせたものである（漢詩訳）。(図:松浦武四郎筆、漢詩:鷲津毅堂作・金井之恭書)



雌阿寒岳・雄阿寒岳眺望の図〈松浦武四郎記念館蔵〉
(図:松浦武四郎筆、漢詩:中村栗園作・小川述堂書)



鹿を調理するアイヌの図〈松浦武四郎記念館蔵〉
(図:島霞谷筆、和歌:三田花朝尼作・書)



トマ・ハラテキの図〈松浦武四郎記念館蔵〉

エンゴサク 夷言トマ、異名滴金露、和名は“つふて”とも言う。山中にあり、地元の人々の一番の食料になっている。雪解け後に、花を咲かせる。
赤沼蘭 クスリ シヤリ ハラテキ アシヘキナ
和名は、燕蘭と言う。日光・赤沼が原で見られるため、この名前の由来となっている。(図:石井鼎湖筆)



アイヌと武四郎との酒宴の図〈松浦武四郎記念館蔵〉
(図:辻柳鳩筆、和歌:鈴木鷲湖作・書)



ヲヘライベ・シユリヲホの図〈松浦武四郎記念館蔵〉
(図:石井石溪・一柳芥舟筆)